



Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ 第90回演奏会

2022年2月11日(金・祝)

府中の森芸術劇場 ウィーンホール



ご挨拶

本日はお忙しい中、またコロナウイルス感染拡大の中、ご来場いただき誠にありがとうございます。

某大学管弦楽団の学生指揮者だった山本誠一郎氏の呼びかけで、1977年1月に第1回演奏会を開催して以来、アンサンブル ディマンシュは本日第90回の演奏会を迎えることになりました。

ディマンシュとはフランス語で日曜日のことです。要するに「日曜日の合奏団」ということですので、基本的には日曜日の午後が練習日です。

当団ホームページの楽団紹介の中に「アンサンブル ディマンシュは楽器で会話できるオーケストラを目指しています。」とありますが、これはメンバー一人一人が自分から音楽を発信してアンサンブルを作っていくという考えに基づいています。指揮者やトレーナーの先生に言われたからのように演奏するのではなく、常に自分たちから積極的にお互いを聴きあって音楽することを目指しています。

今、私の手元に第30回(1992年1月)記念として作成した小冊子があります。その中で、コンサートマスターの時山響子氏がこのように述べています。「時間がふんだんに使えた学生時代から社会に出て家庭を持ち、社会人としても家庭人としても責任が重くのしかかってくる今日、時間的にも精神的にもオケの継続が困難になってきたのも事実です。けれども、願わくは私たちが再び『自分の時間』を手に入れた時、大好きな音楽を実現できる場としてディマンシュが存在してほしいと思います。」... ディマンシュ続けてよかった！

45年全90回の歴史を振り返ることは難しいのですが、今回第90回記念として「ディマンシュはじめて物語～第90回までの歩み～」という冊子を作成しました。このプログラムと一緒にお渡ししていますので是非ご一読ください。

今までの演奏会には本当に多くの方々にご協力いただきました。演奏者はもとより、受付を担当された方、写真や録音、録画を担当された方、ご指導いただいた指揮者、トレーナーの先生方、そして温かい拍手を送ってくれた観客の皆様、この場を借りて、改めて御礼申しあげます。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしく願いいたします。

次は第100回を目指すこととなります。平均年齢も上がっていく一方です。第100回には70歳を超えるメンバーが数名おりますが、皆ますます元気にやっていますので、これからも、アンサンブル ディマンシュの応援をどうぞよろしくお願いいたします。

山口 彰

(アンサンブル ディマンシュ団長)



祝辞

「アンサンブル ディマンシュ」第90回演奏会、おめでとうございます。

大学卒業後も音楽の場が欲しい、と在学中に出会った方々に呼び掛けて始まった「ディマンシュ」ですが、その趣旨は「平等・自由」と「個人の尊重」でした。アマチュアであれ、一人ひとりがその音楽性と個性を十分に発揮し合うこと、それをまとめるのは指揮者ですが、私も「指揮というパート」を担う「メンバーの一人」というのが特徴の一つでもありました。そして、各演奏会に集った人は皆平等なメンバーであり、例えば都合で暫く演奏会に出られなくても、「休団」のような扱いはなく、また参加できればまた「メンバー」です。つまり、「団」ではなく『アンサンブル ディマンシュ』という活動だったのです。

しかしながら、長く続けるうちに「団」的な雰囲気ともなり、私が抜けた後は役割分担もしっかりした組織的運営がなされ、90という回数にまで進められてきました。「コロナ」という騒動もある中、見事なことです。また戸澤先生、平川先生の薫陶を受け、そのサウンドは益々磨かれたものになりました。100回も目前です。応援しております。

山本 誠一郎

(創設者、初代常任指揮者)



アンサンブル デイマンシュ第90回記念定期演奏会に寄せて



第90回演奏会、おめでとうございます。

2016年、尊敬する戸澤さんから直々にデイマンシュ指揮のお話を頂き、即答したことを今でも鮮明に覚えています。2019年に一度離れましたが、再び2020年にお声がかかり現在に至ります。当時のリハーサルは狭い部屋で、いないパートがいることは当たり前、ああ今日は珍しく管楽器がいるのね、そんな声すら聞こえてくる現場でした。しかし、戸澤さんをはじめとするトレーナーの方々や私、そして指揮者の山上さんから何か一つでも吸収しようという姿勢が日々強くなり、徐々にオーケストラの人数も増え活気が増してきました。最近では団員同士が言葉でのやり取りよりも、音楽上で言葉を交わす瞬間が増えたように思います。

普段、音楽とは異なるお仕事をされながら、オーケストラ(とお酒)に大きな情熱を傾けられることは本当に頭が下がりますし、尊敬しております。おかげさまで私も一回一回の練習で何か残したいと思いながら、リハーサルに臨むことができております。

コンミスの時山さんや団長の山口さん、そして「やませいさん」をはじめ、私が生まれる前から活動されてきたデイマンシュに関わった全ての方々に敬意を表するとともに、これからもより良い音楽づくりのお手伝いできれば幸いです。

第100回と言わず、その先もアンサンブル デイマンシュが続いていく事を祈念いたします。

平川 範幸



第90回記念定期演奏会、おめでとうございます。年2回の公演で活動されてきたということですから、何と45年活動を続けてきた訳です。最近知命の歳となった私が楽器を習い始めたのが5歳の時なので、こちらの楽器暦とちょうど同じくらいの長い時間をメンバー同士で共有してきました！これ自体が大きな財産と言えます。音楽団体を創設するのは意外と容易ですが、続けるのには半端ない労力を要します。むしろ、続けてきたことが奇跡と言っても過言ではありません。ここに至るまでの皆さんの意思、そして努力、忍耐(笑)に心からの敬意を表したいと思います。

そんなデイマンシュとの出会いは、17年前、当方の門下生であった大塚杏奈さんがソリストとしてお世話になったことで、リハーサルに立ち会った時となります。その当時は創設時からの山本誠一郎さんが常任としてタクトを振られ、その数年後に再び大塚さんがお世話になった際と合わせて、様々な音楽・活動のアイデアなどのお話をさせて頂いたことがきっかけだったと記憶していますが、ついに2009年にご一緒する機会を頂戴するに至り、その時の共演曲がベートーヴェンの協奏曲でした。当方この時は完全にお客さんとしての存在でしたが、その後始まった弦楽器の指導から徐々に関わりが深まり、10年の時を経て今やオーケストラ全体を任せて頂くまでの濃密な関係を築かせて頂いております。その深化と比例するかのように、音楽・アンサンブルはまさに進化の一途。シティ・フィル指揮研究員であった頃から懇意にしている現指揮者 平川範幸氏との音楽的コミュニケーションも良好に、出会った頃とはまるで別団体に感じるまでの変身を遂げたデイマンシュ。そしてこの記念の回に、同じベートーヴェンを再び奏でられる幸運に、心よりの感謝と共にとてもワクワクしております。デイマンシュの今後のさらなる飛躍を期待して、13年の時を経た自身の進化も間いつつ、この共演を心から楽しみたいと思います！

戸澤 哲夫



アンサンブル デイマンシュの第90回演奏会、誠におめでとうございます。

僕が初めて伺ったのはもう4～5年ほど前でしょうか。当時僕はまだ学生で、オーケストラを振る経験もほぼゼロの状態でした。おぼつかないリハーサルにも皆さんは付き合ってください、練習後に声をかけてくださったのは今でも覚えています。僕の成長を見守ってくださる素敵なオーケストラです。

デイマンシュの素晴らしい点は、音楽に直向きだということだと思います。ただ音を出して楽しむのではなく、より良い演奏を目指す姿勢は、僕の理想とする将来像であり手本そのものです。その直向きさをこれからも持ち続け、是非とも第100回へ向けて歩んでいただきたいです。練習にはいつでもお付き合いさせてください！

アンサンブル デイマンシュの今後の活躍と発展を願いつつ、本日の演奏会を楽しみにしております。本日はおめでとうございます。

山上 孝秋





【プログラム】

～オール・ベートーヴェン・プログラム～

序曲「コリオラン」Op.62

ヴァイオリン協奏曲ニ長調Op.61

ヴァイオリン独奏：戸澤哲夫

「休憩」

交響曲第7番イ長調Op.92



【プロフィール】

戸澤 哲夫
(とざわ てつお)



東京藝術大学を経て同大学院修士課程修了。大学院在学中の1995年1月、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスターに就任し、現在においてまでその重責を果たしており、内外の指揮者からの信望も厚い。

1994年にアルペリ弦楽四重奏団を結成、全90曲7年に亘るベートーヴェン室内楽曲演奏会が2度目に突入するなど、テーマ性を持った活動が特筆される。1996年には安田弦楽四重奏団のメンバーに加わり、ペーター・シュミードル氏など共演者も数多い。

ソリストとしても、各地でのリサイタル活動に加えて、東京シティ・フィルをはじめ、東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団、広島交響楽団などと共演を重ねている。

1998年より1年間、アフィニス文化財団の海外派遣事業によりドイツ・ベルリンに留学、元ベルリン・フィル コンサートマスターの故 ライナー・クスマウルのもとで研鑽を積む。

2001年、シヨスタコーヴィチで定評のあるモルゴア・クアルテットのメンバーとなり、その意欲的な活動に対して、2010 年度アリオン賞、2015年第14回佐川吉男音楽奨励賞、2017年第47回JXTG音楽賞洋楽部門本賞を受賞。プログレ名曲をカバーしたアルバム「21世紀の精神正常者たち」「原子心母の危機」「トリビュートロジー」は、大きな反響を呼んでいる。

2019年、BSテレ東「エンター・ザ・ミュージック」にてナビゲーターを務める藤岡幸夫プロデュースによる新カルテット、The 4 Players Tokyoのリーダーとして指名され、第1ヴァイオリンを担当。4つの異なる楽団のトッププレイヤーから成る豪華カルテットとして、“弦楽四重奏をもっと身近な存在に”をスローガンに精力的な活動を続け、今後のさらなる展開に期待が高まっている。

平川 範幸
(ひらかわ のりゆき)



福岡県出身。福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講する。これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団のもとで活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者のもとで研鑽を積む。これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、千葉交響楽団、浜松フィルハーモニー管弦楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

【曲目紹介】

～オール・ベートーヴェン・プログラム～

◆序曲「コリオラン」Op.62

「コリオラン序曲」でないの？と思った方もいるでしょう。昔は確かにそう言っていたような気がします。最近では両方使われていますが、「序曲『コリオラン』」の方が主流になっています。一方、エグモントはというと、「劇音付随音楽『エグモント』序曲」又は略した「エグモント序曲」が多く使われていますが、「序曲『エグモント』」はほとんど使われていません。この違いは何でしょうか。

「序曲」の語源はフランス語の「Ouverture」ですが、この語は「開くこと」、すなわち英語の「Opening」を意味します。それが転じて、歌劇、劇付随音楽などの舞台音楽や組曲の「開始の音楽」として使われるようになったものです。エグモント序曲は、「エグモント」という劇付随音楽があって、その最初に演奏される文字どおり「序曲」です。しかし、コリオランの場合は舞台音楽がなく、「コリオラン」という悲劇の印象を題材にした独立した音楽です。つまり本来の意味の「序曲」ではありません。このような序曲は「演奏会用序曲」と呼ばれ、本来の序曲とは便宜上区別されています。序曲「コリオラン」のように「序曲」を前に置くのは、演奏会用序曲を表していると考えられます。演奏会用序曲は、その後シューベルト、ベルリオーズ、メンデルスゾーンなどロマン派の作曲家へと引き継がれていきますが、「～風」「～的」など形容詞的な語を冠する場合や「祝典序曲」などの慣用句を除き、「序曲」は前に置かれることが多いです。

ベートーヴェンは、友人のヨーゼフ・コリン(1771-1811)が古代ローマの将軍コリオヌスを題材として書いた悲劇を観て感銘を受け、1807年にこの曲を書いています。この時期は、「傑作の森」と呼ばれる中期の最も充実した創作期で、この曲の前後には、ピアノ協奏曲第4番(1806)、交響曲第4番(1806)、ヴァイオリン協奏曲(1806)、交響曲第5番「運命」(1808)、同第6番「田園」(1808)など、傑作が矢継ぎ早に生み出されています。

冒頭、弦楽器がユニゾンでC(ト)の音を ff で2小節間延ばした後、緊張感のある和音で解決します。このインパクトのあるモチーフが2回繰り返されますが、出てくるたびに解決和音に変化していき、緊張感が最高に達したところで暗い第一主題が始まります。第二主題はそれとは対照的に優雅ですが、どこか陰のある旋律です。最後にチェロが断末魔の苦しみのような旋律を歌うと弦楽器のピチカートで静かに終わります。

◆ヴァイオリン協奏曲ニ長調Op.61

この曲は、以前はベートーヴェンの「唯一の」ヴァイオリン協奏曲と言われていましたが、最近では「唯一の完成した」とされています。ベートーヴェンの死後40年以上も経った1870年、第1楽章の途中(259小節)まで書かれたハ長調のヴァイオリン協奏曲の手稿がウィーンで発見されました。これはベートーヴェンが20歳頃に手掛けたヴァイオリン協奏曲の一部であることが分かりましたが、途中でボツにしたのか、残りが紛失したのかは現在でも議論されています。この未完の第1楽章は、何人かのヴァイオリニストなどが補筆して完成させ、出版されています。また、近年演奏録音もされています。

唯一の完成した協奏曲が書かれたのは1806年で、作品番号は61です。序曲「コリオラン」が62なので、一つ前に当たり、同様に「傑作の森」と呼ばれる時期の作品です。初演は、1806年12月23日にアン・デア・ウィーン劇場オーケストラのコンサートマスターであったフランツ・クレメントの独奏で行われています。作品の完成がぎりぎり、クレメントはほとんどさうらう余裕がなかったにも関わらず見事に演奏したと伝えられています。しかし、作品自体の評判はあまりよくなかったようで、その後しばらくはほとんど演奏されることもなく忘れ去られていました。この曲を秀作として世に広めたのは、ブラームスの協奏曲を初演したヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)でした。ヨアヒムはこの曲のためのカデンツァも残しています。

カデンツァはソリストが無伴奏で即興的に演奏する部分で、「聴きどころ」のひとつですが、ベートーヴェン自身はこの曲にカデンツァを書いていません。そのため、ヨアヒムやクライスラーなど歴代のヴァイオリニストが挙ってこの曲のカデンツァを書き残しています。往年の録音から現代のライブ動画など、ソリスト100人余の演奏を実際に聴いてみたところ、クライスラーのものが実に7割以上を占め、圧倒的な支持を得ていることが分かりました。以下、ヨアヒム、シュナイダーハン(後述)とその他が各1割前後という結果でした。

一方、1807年、ベートーヴェンはクレメンティの依頼でこのヴァイオリン協奏曲をピアノ協奏曲に編曲しています。クレメンティはソナチネの作曲者として有名ですが、当時は楽譜出版業も営んでいました。ベートーヴェンはこのピアノ協奏曲版にはピアノ用のカデンツァを書いています。特に第1楽章のカデンツァは、ティンパニが加わって協演するという独創的なものです。ウィーン・フィルのコンサートマスターの経験があるヴァイオリニストのヴォルフガング・シュナイダーハン(1915-2002)は、このピアノ用のカデンツァをヴァイオリン用に編曲しています。シュナイダーハン自身の演奏録音は幾つか残っていますが、それによると、1959年以降の録音でこのカデンツァが使用されており、1955年以前はヨアヒムのものが使用されています。このカデンツァはその間に作られたと思われます。本日は、このシュナイダーハンのカデンツァを演奏します。ティンパニとの協演をお楽しみください。

第1楽章 **Allegro ma non troppo** ニ長調 4/4拍子

冒頭、ティンパニがソロで四つの四分音符を刻むとオーボエによる第一主題が始まります。このティンパニのリズムはこの楽章全体を支配する重要なものです。優雅な第二主題は、シレジア地方(主に現在のポーランド領)の民謡からの引用とも言われています。ソロの導入部や経過部には、クロイツェルのヴァイオリン協奏曲(特に第13番、第19番など)の影響と思われるパッセージがみられます。

第2楽章 **Larghetto** ト長調 4/4拍子

弱音器を付けた弦楽器による静かな主題が提示され、ソロのオブリガートとともに変奏されていきます。静けさを保つため、フルート、オーボエ、トランペット、ティンパニはお休みです。最後に短いカデンツァの後、続けて次の楽章に入ります。

第3楽章 **Rondo, Allegro** ニ長調 6/8拍子

前楽章に続いて、いきなりソロが舞曲のような8分の6拍子のロンド主題を弾き始め、弦楽器が合の手を入れます。中間部に入るとソロがメランコリックな美しい主題を歌い、ファゴットがそれを引き継ぎます。

◆交響曲第7番イ長調Op.92

某放送局が数年前にベートーヴェンの作品の人気度を街頭調査したところ、交響曲の第1位は下馬評どおり「第九」でしたが、第2位は、「運命」や「田園」、「英雄」という知名度の高い曲を押さえて、「第7番」という結果でした。これは意外でしたが、10数年前に音大生のオーケストラをテーマとしたテレビドラマが放映され、その主題曲として採用されたことが要因でしょうか。いや、それだけではないようです。ウィキペディアによると、この曲は、20を超える映画やドラマ、CM等のBGMとして使用されているのです。記憶に新しいところでは、年末ジャンボ宝くじのテレビCMで第1楽章の主題に歌詞を付けて歌っていたのが印象的でした。(宝くじなら「運命」の方が合っているような気がします。...) また、変わり種では、ドイツの振付師がこの曲に振り付けをしたバレエが1991年に発表されています。

この曲は1811年から1812年にかけて作曲され、「ウェリントンの勝利」などととも1813年12月8日にウィーンで初演されています。この演奏会は戦争で傷病を負った兵士のための慈善演奏会でした。第2楽章が葬送行進曲風なのは、戦争を意識しているのかもしれませんが。初演時には、弦楽器奏者の数を増やしたり、管楽器奏者を倍にしたり、さらに原曲にはないコントラファゴットを加えたりと、大編成で演奏されたようです。評判はよかったようで、第2楽章がアンコールされたと伝えられています。

この曲の最大の特徴は、各楽章が特徴的なリズム動機で構成されていて、まるで舞踊音楽のようであることです。このことは、後世の作曲家の間でも賛否両論分かれています。リストやワーグナーは「リズムの神化」「舞踏の聖化」と絶賛。一方、ウェーバーや指揮者として有名なワインガルトナーは「もはやベートーヴェンは病院行きだ。」「他のいかなる曲よりも精神的疲労を生じさせる。」と酷評しています。

ちなみにこの曲、アマチュアのホルン奏者にとっては限界に近い高音を吹きまくる技術的に難しい曲です。選曲のときは必ずホルン奏者にお伺いを立てなければなりません。

第1楽章 **Poco sostenuto - Allegro vivace** イ長調 4/4-6/8拍子

第4番以来の長い序奏が復活、しかも62小節という長大なものです。冒頭の弦楽器に現われる ff の1拍の重音と p の1小節の延ばし音のモチーフは、和音を変えて2回繰り返されます。このモチーフの奇数小節と偶数小節を逆に演奏すると和音や強弱は異なりますが「コリオラン」の冒頭のモチーフに似ているのは偶然でしょうか。主部は8分の6拍子で「ターンタ・ターンタ」というリズムの繰り返しが楽章全体を支配しています。

第2楽章 **Allegretto** イ短調 2/4拍子

アレグレットの緩徐楽章は、ハイドンの交響曲第100番「軍隊」などにも見られるように、速いというよりはゆったりとした行進曲と考えられます。この楽章は葬送行進曲風で、構造などにも「英雄」の第2楽章との共通点がみられます。ヴィオラ以下の低弦が「タンタ・タンタン」というリズムを繰り返す暗い主題を奏で、これが2ndヴァイオリン、1stヴァイオリンへと受け継がれ変奏されていきます。

第3楽章 **Presto - Assai meno presto** ヘ長調 3/4拍子

速いスケルツォとテンポを落としたトリオですが、第4番以降「スケルツォ」とは特に表示されていません。第4番と同様に3回出てくるスケルツォの間にトリオが2回挟まっているA-B-A-B-A-Codaという複合三部形式です。コーダではトリオが短く回想されて終わります。

第4楽章 **Allegro con brio** イ長調 2/4拍子

現代のポピュラー音楽に見られるアフタービート(弱拍の2拍目にアクセント)が特徴的な舞曲のような楽章です。思わず手拍子がしたくなります。1stヴァイオリンが弾く第一主題の裏では、低音弦がアフタービートを繰り返し、内声弦が sf の続く超絶技巧?の「刻み」を繰り返しています。これを弾くと腱鞘炎になる内声弦奏者もいるとか。

*

余談ですが、オーボエ奏者に言わせると「A(ラ)で始まる三大おいしい曲」というのがあって、一つはブラームスのヴァイオリン協奏曲第2楽章ですが、あと二つは本日演奏するヴァイオリン協奏曲と交響曲第7番だそうです。三大のうち二つも同じ演奏会で演奏できるなんて、オーボエだけ演奏会の負担金を増やそうかな。

(独り言です。)

(鷹)

皆さんがキチンと挨拶してくれる。練習会場設営、撤去をさぼる人がいないところが良いところ。
(T.O ホルン 第84回 7回)

小編成で自己の腕前がそのまま出る。向上心も強く練習は厳しいが本番の充実感は格別。
(T.S コントラバス 第1回 78回)

ここ数年、ディマンシュ全体がどんどん変化・成長していると感じています。年齢は関係ないということですね！
(T.T フルート 第13回 35回)

音楽を創り上げる、このことが原動力で気が付いたら90回。感謝しています。
(S.S ヴァイオリン 第3回 57回)

ほぼ毎週日曜日のたっぷりの練習、和気あいあいの中で厳しさもあり、いつも楽しみです。
(R.N チェロ 第89回 2回)

ディマンシュの良いところは、主体性を持って参加されているところ。具体的には、トップ以外や他パートからも先生へ質問したり、コメントが行われるところ。
(A.A ヴァイオリン 第84回 7回)

珍しい曲も試しやすく、内声部の音が目立ち過ぎずかつ埋もれないこの規模が好き
(J.S ヴィオラ 第2回 81回)

合奏中に質問や意見が飛び交ったり、笑いが起こったりするところがいいなと思います。
(T.N クラリネット 第85回 5回)

記念すべき第90回公演に初参加させていただきますことを大変光栄に思います。
(Y.F チェロ 第90回 1回)

楽器で対話する楽しみは、ここじゃないとね。11回の定期以来、皆出席で40年吹いています！
(K.K ファゴット 第11回 80回)

皆さん練習熱心で毎回練習に学びがあるところが素晴らしい。練習も本番も楽しいです。
(Y.M ヴァイオリン 第89回 2回)

ディマンシュの辞書に「もう年だから」「いまさら」は無い。オケ仲間こそ人生の財産！
(K.T ヴァイオリン 第1回 89回)

ディマンシュのヴィオラは5人で「ヴィオレンジャー」と呼ばれています。「レンジャー」とは元々「徘徊する人」のことなのですが。
(T.S ヴィオラ 第1回 88回)

上達に年は関係ない。目標を明確にし楽しく練習すれば、だれでも上手くなれる。近道はないが、みんなで進化し続けたい。
(A.Y ヴィオラ 第2回 87回)

ただ純粋に大好きな音楽を追い求めるアンサンブル・ディマンシュ。好きなもの前では永遠の子供であり、時折我儘が炸裂することも面白いところ。
(A.I オーボエ 第27回 62回)

メンバーの ディマンシュへの想い

(名前 担当楽器 初出演 出演回数)

初参加からの42年間で自分がどう変わってきたか、音楽で赤裸々に表現され記録されてしまっている。恥ずかしいことであるが得難い財産です。その時々で一緒に演奏した仲間に心から感謝します。
(T.Y オーボエ 第5回 78回)

困難な課題にも果敢にそしていつも明るく取り組んでいるところが好きです。
(T.K チェロ 第84回 7回)

「楽器で会話する」ディマンシュ。会話がより濃く楽しいものに変化し続けているところが、すごく面白いところです。
(H.I ヴァイオリン 第76回 16回)

大人の音楽の楽しさをアンサンブルと設定して、その実現のために練習を積み重ねているところ。おいしいお酒を楽しむ方が多いところ！
(T.N ヴァイオリン 第66回 14回)

私が一番長く参加させて頂いたオケです。他の所では出来ない音楽にはまってきました。
(T.H ティンパニ 第21回 32回)

こう弾きたいと思う音楽を体感出来る、周りの音を傾聴し、音楽の高みをもっと感じたい。
(M.N ヴァイオリン 第29回 40回)

トランペットに大音量を求められず1管楽器としてアンサンブルを堪能できるのが魅力です。
(K.K トランペット 第39回 34回)

ディマンシュが結成された年、私はまだ幼稚園児。いま人生折り返しとも言える年齢になりましたが、ここではひよっこです。
(R.T フルート 第81回 8回)

初参加後あっという間に2ndVnパートを1人託され、宴会と練習の楽しさに続け、メンバーが増え今回4人となりました。進化を続ける2ndにもどうぞ注目ください！
(M.M ヴァイオリン 第64回 27回)

練習内容の密度が濃く、毎回勉強になります。皆で常に向上を目指す雰囲気大好きです。
(S.M チェロ 第66回 22回)

平均年齢が毎年上がっている一方で、音楽は毎年進化し続けている
(Y.S ヴァイオリン 第74回 18回)

お酒と料理が美味しい。指導陣に恵まれ歳をとっても進化中。音楽を作る楽しさを学べる
(H.E コントラバス 第77回 14回)

年齢を重ねても、練習を重ね、進化し続ける先輩方がとてもステキなところです！
(C.S クラリネット 第51回 25回)

練習が進むにつれ、本番の日が来てほしくないと思ってしまうほど練習が楽しい
(K.S ヴィオラ 第70回 20回)

縁あって自分の年と同じこのオケに加わりました。とにかく楽しく吹きたいです。
(M.H ファゴット 第79回 12回)

♪ 第90回メンバー ♪

第1ヴァイオリン 三瓶政一、☆時山響子、西川富之、西村 実、本山まり子、若月洋人
第2ヴァイオリン 相羽あゆみ、石嶺寿子、関根佳子、宮本 敦、森上由紀、♪森 未知
ヴィオラ 柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、山口 彰
チェロ 工内智恵、永田隆司、藤村ゆ香、♪三次摂子
コントラバス 江川博之、♪須賀敬亮

☆コンサートマスター ♪弦楽トップ

フルート 谷口玲子、徳植俊之
オーボエ 市川亜理、山口高司
クラリネット 鈴木千暁、中嶋智子
ファゴット 越島康太郎、星野未央
ホルン 尾形武一、金澤恵子、友田昭博
トランペット 鴨狩公一、菌部晴信
ティンパニ 星野武徳

トレーナー 戸澤哲夫 (東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)
パート指導 須山暢大 (大阪フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター)
パート指導 臼木麻弥 (東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席ヴィオラ奏者)
パート指導 岡本梨紗子 (チェロ演奏家)
パート指導 山崎 実 (東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席コントラバス奏者)
練習指揮 山上孝秋



♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2022年9月24日(土)
場所：府中の森芸術劇場 ウィーンホール
指揮：平川 範幸
曲目：ベートーヴェン 交響曲第8番へ長調op. 93
ほか

詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。



本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

ベートーヴェン：

歌劇「フィデリオ」 op.72 から

行進曲（第1幕第6曲）

でした。

「フィデリオ」はベートーヴェンが完成させた唯一のオペラです。



パリ初演時の公演記録より（フランス国立国会図書館蔵）